

イチヨウ 物語 ④

東京スカイツリーを望む東京都墨田区の飛木稲荷神社。鳥居のそばにそびえる大イチヨウの前に今年6月、一枚の掲示板が立てられた。

延焼防ぐ

「身代わり飛木の焼けイチヨウ 昭和20年(1945年)3月10日の東京大空襲で、ご神木は我が身を焦がし、懸命に炎を食い止め、町の延焼を防ぎました。そして幸いにも多くの人たちが助かりました」

大イチヨウは今も木肌が黒光りし、鼻を近づけるとかすかに焦げたにおいがする。樹幹は旺盛に葉を茂らせるが、焼けた傷跡は65年前の出来事を、生々しく、鮮明に、物語っていた。

掲示板を立てることに決めたのは地域の氏子総代。その一人で、この近くで東京大空襲を経験した富田明さん(84)は、イチヨウの存在をこう語った。「黒焦げになりながら、数年後に奇跡的に芽吹いたこの木は、戦争を生き抜いた私たちの心のより

幹の傷跡 戦禍を語る

どころ。平和の大切さを教えてくれているんです」

現在、境内には、大イチヨウのほか、日本のイチヨウが立つ。その多くが被災樹木。

社務所には、今よりも大きく枝を伸ばして立つ被災前の大イチヨウの写真が飾られている。宮司の千葉元さん(63)は、「樹皮で覆うようにして自ら傷を癒やしている姿は、これから先も無言で当時の惨状を語り伝えてくれるでしょう」と語る。

復興の芽

戦争の語り部が高齢化し、年々少なくなっていく中、「声なき生き証人」として、被災樹木の存在が重みを増している。生

命力の強いイチヨウは、戦災の傷跡を刻む樹木が各地に残る。その存在を次の世代に伝える取り組みが進んでいる。

宇都宮市は45年7月12日深夜から未明にかけての空襲で、市街地のほぼ半分を焼失した。死者は620人以上。市中心部の東武宇都宮駅近くにある大イチヨウも黒焦げになった。だが、翌年春に新芽を吹き、復興に励む人々を勇気づけた。

その「戦災復興のシンボル」を守り伝えようと、今年4月、地域住民が「大いちちょうを守る地域振興会」を発足させた。5月にはイチヨウ葉のエキス入り焼酎「宇都宮 大いちちょう」(720ミリ・炒)を作った。価格は1100円。うち1000円を大イチヨウの保全に活用するという。



「大イチヨウは火柱を上げて燃えたそうです」と黒焦げのイチヨウの前で話す宮司の千葉元さん(東京・墨田区の飛木稲荷神社)

* 杉本昌大撮影



空襲で焼けた当時の宇都宮市の大イチヨウ(宇都宮市提供)

近くの宇都宮市立一条中学校は2009年度から、大イチヨウを通して平和や命の尊さを学ぶ「大いちちょうプロジェクト」を開始。昨秋、生徒が大イチヨウのギンナン約1000個を拾い、学校のプランターに植えた。春には発芽。育った苗を生徒自身が市民らへ配っている。

「よみがえった黒こげのイチヨウ」などの著書があり、被災樹木に詳しい唐沢孝一さん(67)は、「被災樹木を見たり、触ったりして五感を研ぎ澄ませ、当時を思い起こしてみたい」と話し、被災樹木がたくましく生き続けることを願っている。

メモ イチヨウは長寿だ。厚い樹皮と強い萌芽力があり、耐火性・防火性も高い。東京・日比谷公園にある通称「首かけイチヨウ」はその生命力の強さを証明している。明治時代、日比谷通りの拡張工事で切り倒される運命だ

だったが、公園の設計者・本多静六が「首にかけても」と現在の場所へ移植し、根付いた。1971年には、すぐ横のレストランが火事になり、木も黒焦げになったが生き延びた。老化し腐朽しているが、今も葉を茂らせる。